

災害・国際医療協力隊ティーマツト

TMATニュースダイジェスト

2022年6月30日発行

発行 特定非営利活動法人(NPO 法人) TMAT
〒102-0074
東京都千代田区九段南 1-3-1 東京堂千代田ビルディング 14F
Tel 03-3263-8136 Fax 03-5214-6664
Email info@tamt.or.jp
制作 一般社団法人徳洲会 広報部

Tokushukai Medical Assistance Team



No.14

www.tmat.or.jp



第14号発行のご挨拶

クラウドファンディング協力に感謝
ウクライナ避難民への支援活動継続

ふくしま やすよし
NPO法人 TMAT理事長 福島 安義



2022年2月24日、突如、ロシアがウクライナに侵攻し戦争が始まりました。以来、高齢者や女性、子どもなど、多くのウクライナの方々が戦火を避けるため、世界各国に避難しています。こうした状況下、TMATとしては、戦場に隊員を派遣することは叶いませんが、何かできることがないか模索しました。その結果、ウクライナの隣国であり、多くの避難民の方々を受け入れているモルドバ共和国の信頼できる2つのNGO(非政府組織)と連絡が付き、この両NGOのご協力により、モルドバ国内の避難民の方々と、ウクライナ国内の医療機関に対し、医薬品などを援助できる方法を見いだせました。まずはTMATの資金により、両NGOを通じ支援を行いました。また、5月9日からTMAT隊員3人をモルドバに派遣し、実際にどのような援助を行えるか視察しました。調査の結果、現地に隊員を派遣し医療支援などを実施するニーズがないことがわかりました。しかしながら、引き続き、モルドバ国内のウクライナ避難民の方々や、ウクライナ国内の病院に対し、生活物資や医薬品など消耗品の提供が必要であることを認めたため、両NGOを通じ、支援を継続している次第です。皆様方にご協力をいただきましたクラウドファンディングによる資金によって、ウクライナ避難民の方々や、ウクライナ国内の医療機関への支援を確実に実行しています。この戦禍がいつ終わるのか先が見通せない状況にありますので、今後ともご支援、ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

モルドバの周辺地図



実際に4月上旬から各種の物資支援を実行しており、モルドバの首都キシナウから北に約100kmのカザネシュティ村に避難した方々には衣服や調

理・食器器具、食料などの物資支援を行った。「カザネシュティ村にはウクライナ南部で戦闘の激しかったムイコライウという町からの避難者が身を寄せています。支援の手が届きにくく、着の身着のままで避難した経済的に厳しい方々が多いことから、生活物資の支援を行いました」TMAT事務局でロジスティクス統括の野口幸洋・一般社団法人徳洲会医療安全・質管理部課長補佐)

「苦しみ方々のために力になれることをする」



ウクライナの国内に送った医療物資(写真提供: NCUM)

黒海に面したウクライナ最大の港湾都市オデーサから来た、キシナウにある農業大学の寮に避難しているウクライナ避難民にも同様に生活物資を支援した。さらに、ウクライナ国内の病院に対して、病院からの要望にもとづいて抗生物質や解熱・鎮痛剤、止血剤、ガーゼなどを支援。ウクライナ国内では流通ルートが遮断され、医療物資が不足する状況が続いているためだ。

ウクライナ国外から同国内に医療物資を持ち込むにはウクライナ当局からの許可が必要であるため、モルドバ国内で医療物資を調達後、許可証を得た上で、ウクライナ国内のNGOを通じて同国内の病院に医療物資を届けた。これまでにウクライナ西部地域にあるチェルニヴツィ病院に医療物資を届けてきた。この支援に対し同院からTMATに感謝状が贈られた。

5月9〜14日にかけてモルドバ入りしたのは、TMAT理事を務める湘南鎌倉総合病院(神奈川県)の河内順・副院長(兼任任外科部長、武蔵野徳洲会病院(東京都)の原田生代美看護師(兼ロシア語通訳)、野口・課長補佐の3人。

(2面に続く)

2月24日にロシアがウクライナに軍事侵攻を開始して以降、戦火を逃れるため500万人以上



ウクライナ国内の避難施設の様子(写真提供: NCUM)

上が国外に退避し、さらに同数以上の国内避難民が発生している。ウクライナの南側の国境に接するモルドバは人口約260万人の小国。ウクライナから多くの難民が押し寄せ、これまで40万人以上を受け入れてきた。難民の多くは生活の拠点を求めて、より西側の欧州各国へ移動していくが、約10万人が臨時避難所などにとどまっているとされ、欧州最貧国であるモルド



支援先のウクライナ難民の健康チェックを行う河内副院長(その右が原田看護師)

バへの支援の必要性が高まっている。こうしたなか、TMATはウクライナ難民支援に関して、モルドバの現地NGOであるモルドバ日本文化文明協会と、National Congress of

ウクライナ
難民支援

ウクライナ難民支援活動を行うNPO法人TMATは、多数のウクライナ人が避難している隣国のモルドバ共和国に、5月9〜14日にかけて調査チームを派遣した。また調査チームの派遣に先立ち、TMATは現地NGO2団体と協力関係を築き、モルドバに逃れてきたウクライナ難民への物資支援や、ウクライナ国内の医療機関への医薬品提供など支援活動を4月から実行。今回の派遣では現地NGO関係者と長期的な支援活動に向けての協議を行ったほか、支援先やモルドバ国内の医療機関、南東部の国境エリアの視察、医療支援ニーズの調査を実施した。

生活物資や医薬品など
長期的支援へ

モルドバに調査チーム派遣

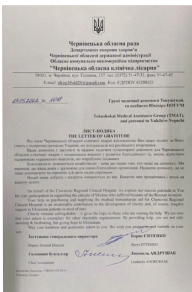


カザネシュティ村に避難する難民に届いた生活物資(写真提供: モルドバ日本文化文明協会)

Ukrainians of Moldova(NCUM)と4月1日付で協定を締結。前者との連携では、モルドバ国内に避難しているウクライナ難民に対し、衛生資材や食料、その他の生活必需品などの物資を支援。後者とはウクライナ国内の病院などに医薬品を含めた医療物資の支援を行っている。

継続的な支援活動を展開していくために、TMATは4月1日から1カ月間にわたりクラウドファンディングによる支援金の募集を実施。多くの賛同者による協力を得られた結果、期間満了を待たずに目標額の1000万円に到達した。支援活動の長期化を見すえ、5月以降も引き続き寄付金(クラウドファンディングではなく通常寄付)の募集を継続している(2面囲み)。

TMATの派遣実績			国内	海外	
1995年	1月	阪神・淡路大震災	2010年	3月	中国・青海省地震
1995年	9月	サハリン大地震	2010年	10月	奄美豪雨災害
1999年	9月	9.21台湾大地震	2011年	3月	東日本大震災
2004年	10月	新潟県中越地震	2011年	10月	トルコ東部地震
2004年	12月	インドネシア・スマトラ沖地震 (その他4カ国)	2013年	11月	フィリピン台風災害
			2015年	4月	ネパール大地震
2005年	2月	福岡西方沖地震	2015年	9月	関東豪雨災害(常総市)
2005年	10月	パキスタン北部地震	2016年	4月	熊本地震
2006年	2月	フィリピン レイテ島地滑り災害	2016年	10月	ハイチハリケーン災害
2006年	5月	インドネシア ジャワ島中部地震	2018年	7月	西日本豪雨災害
2007年	3月	能登半島沖地震	2018年	9月	北海道胆振東部地震
2007年	7月	新潟県中越沖地震	2018年	10月	インドネシアスラウェシ島地震
2008年	5月	ミャンマーサイクロン災害	2018年	11月	ロヒンギャ難民支援(バングラデシュ)
2008年	5月	中国・四川省大地震	2019年	8月	九州北部大雨
2008年	6月	岩手宮城内陸地震	2019年	9月	台風15号(千葉県)
2008年	6月	岩手北部地震	2019年	10月	台風19号(長野県・宮城県・他2件)
2010年	1月	ハイチ大地震	2020年	7月	九州南部豪雨(熊本県)
2010年	2月	チリ地震	2022年	5月	ウクライナ難民支援(モルドバ)



チェルニヴツィ病院からTMATに贈られた感謝状

支援金の募集を継続

長期的支援に協力を！

NPO法人TMATはウクライナ難民支援のため4月1～30日にかけて、1000万円を目標にクラウドファンディングで寄付金を募った。多くの企業や団体・組織、グループ内外の個人の協力により、期間の終了をまたずに目標額を達成。4月30日時点で支援総額は1,435万3,850円にも上った。支援活動の長期化が見込まれることから、TMATは支援金の募集を継続しており、引き続き協力を呼びかけている。

集まった支援金は、モルドバのNGO 2団体と連携し、モルドバに避難するウクライナ人難民への物資支援や、ウクライナ国内の医療機関への医療物資支援などに充てる。

ウクライナ人難民支援への協力はQRコードもしくは下記URLまで。

<https://congrant.com/project/npotmat/4360>



振込口座	銀行・支店名	三菱UFJ銀行 虎ノ門中央支店（332）
	口座	普通0246921
	名義	特定非営利活動法人 TMAT理事 福島安義



モルドバ国内の複数の主要な医療機関を視察



モルドバ日本文化文明協会のメンバーと協議
(左から一人目がライサ・ブラドゥツァーヌ代表)

支援先の避難施設 健康チェックを実施

高校の寮を転用したカザネシュティ村の避難施設は、多

を行っていく。また協議では長期的な物資支援の重要性を確認した。
NCUMとも4月から連携し、ウクライナ国内の医療機関に医薬品などを支援してきた。今後も同様の支援を継続する。NCUMは事務所に隣接する避難者用の施設を運営しており、高齢者が避難してきた際に車いすや移動手段がないなど支障が生じていたことから、モルドバ国内に避難するウクライナ難民への物資支援なども行っていく。

調査チームは支援先である避難施設の視察に加え、モルドバ国内の医療事情を確認するため、国立母子科学医療センター、キシナウ市立第一病院、国立救急医療科学センター、カザネシュティ村ヘルスセンターなども視察。パランスカの視察に加え、WHO（世界保健機関）カントリーオフィスマも訪れて情報収集を行った。在モルドバ日本大使館を表敬訪問し大使館職員と情報交換を行ったりした。



NCUMのメンバーと協議中の様子(右から一人目がドミトリー代表)

が寄贈した歯ブラシを届けた。同村の医療を担うヘルスセンターは国立の医療施設で、医師ふたりをはじめ看護師など数人のスタッフが住民への医療を提供し、子どもから高齢者や妊婦まで対応。診察室以外に、エコー（超音波検査装置）、産婦人科診察台、薬局な

いときには最大で130人ほどが避難。視察で訪れた際には36人が避難生活を送っていた。このうち19人は子どもだった。避難者の人数が落ちついてきたため1家族に1部屋が割り当てられ、教育に関してはUNHCR（国連難民高等弁務官事務所）が設置した無料WiFiを利用し、ウクライナ国内の学校とオンラインでつないで授業を受けていた。訪問時にTMATは食料品など生活物資や、湘南鎌倉医療大学災害医療・国際医療サークル

どがあり、同施設で対応できない重症の患者さんは他の高性能な医療施設に転送しているということだった。
もうひとつの支援先である農業大学の寮も訪問時は36人の避難者が暮らしていた。2家族で1部屋を利用。避難生活が長くなってきたことにより、健康上の不安を訴える方々もいたことから、河内副院長と原田看護師が健康チェックを行う場面もあった。具体的には、①喉が痛く昨日まで熱があった②咳が少しでる③首が痛む④アレルギー症状⑤肝臓付近が痛むといった訴えがあり、持参した聴診器などを用いて健康状態の確認を行った。NCUMが運営する避難施設を視察したときには、オデーサから前日、車で避難してきた家族と面談。オデーサで爆撃を経験したこの家族は「いつ避難できなくなるかわから



キシナウにある農業大学の寮に届けた衣服や食料などの生活物資 (写真提供: モルドバ日本文化文明協会)

面談した同センターのスタッフからは、これまで医薬品に関してはロシアとウクライナからの輸入が多く、戦争によってそれがストップし、とても困っているといった声が聞かれた。また、今回の視察では同センターをはじめ、モルドバ国内の複数の主要な医療機関を訪問したが、使用している医療機器などは総じて古いものが多く、10年以上経過している機器も少なくなかった。

母科学医療センターは約1000床のモルドバ最大の医療機関。ロシアによる軍事侵攻後、1000人以上のウクライナ人を診療してきた。年間5000件以上の分娩を行い、ハイリスクの妊婦を多数受け入れ、NICU（新生児集中治療室）があり未熟児の受け入れも行っている。これまで40人のウクライナ人がモルドバに避難後、同センターで出産したそうだ。

ないため、モルドバへ逃れてきました」と消息を語った。
母子科学医療センターは約1000床のモルドバ最大の医療機関。ロシアによる軍事侵攻後、1000人以上のウクライナ人を診療してきた。年間5000件以上の分娩を行い、ハイリスクの妊婦を多数受け入れ、NICU（新生児集中治療室）があり未熟児の受け入れも行っている。これまで40人のウクライナ人がモルドバに避難後、同センターで出産したそうだ。



徒歩でモルドバに避難するウクライナ難民

モルドバでは、避難してきたウクライナ人はモルドバ人と同様の医療を受けられる仕組みが確立しているため、ウクライナ人は安心して受診できる環境にあることが分かったが、一方で、欧州最貧国と言われるモルドバの医療機関が抱える課題も見えてきた。
キシナウ市立第一病院は5



国境にあるレジストレーション・センターを視察

は、オデーサに近いパランスカにある病院で出産の予約をしていましたが、戦争が始まりモルドバに避難してきました。そしてこの病院で無事出産することができました」と話した。モルドバ南部では最も大きいステファン・ヴォダ病院は135床、視察に訪れた13日までに30人のウクライナ人を受け入れてきた。

モルドバ派遣中にオンラインで交流会 湘南鎌倉医療大学 災害医療・国際医療サークル



学生からの質問に答える河内副院長

NPO法人TMAT（徳洲会医療救援隊）は、ウクライナ難民支援活動の一環で隣国モルドバ共和国に調査チームを派遣中の5月14日、モルドバ国内の現地滞在施設と湘南鎌倉医療大学（神奈川県）をインターネット回線で結び、同大学の災害医療・国際医療サークルに所属する学生とのオンライン交流会を実施した。TMATは昨年から同サークルと交流する機会を設けており、現地から生の情報を伝えることで、支援活動への理解を深めてもらうために企画した。

交流会ではまず、野口・課長補佐がモルドバでの活動内容や支援先、モルドバ国内の医療事情など動画を交えて説明。同サークルが提供した歯ブラシを支援先に寄贈した際の様子なども動画で伝えた。河内副院長、原田看護師は滞在中に見聞した現地の様子などを紹介。「モルドバの状況は落ち着いており、ウクライナ難民の方々が医療を受けられず困っているという声はありませんでした。ただし戦争の行方によっては医療ニーズが急増し、状況が変わる可能性があります」（河内副院長）。このあと、ウクライナ難民の方々の生活や健康上の問題、子どもの教育問題などについて活発な質疑応答を行った。



モルドバ南東部の国境付近には難民急増に備えテントが建ち並ぶ

を視察。ウクライナとモルドバの国境にある町で、国境地帯（ボーダーエリア）まで途中に検問はなかった。銃をもった兵士もおらず、辺りに物々しい雰囲気はなく、落ち着いた空気が流れていた。TMAT調査チームは、難民登録などを行う国連のレジストレーション・センターを訪問した。レジストレーション・センターでは難民登録や食事の提供、一時待機場所の提供、必要に応じてメディカルチェックを行っており、ボーダーエリアの開けた平地には、それぞれの役割を担うプレハブ型の施設やテントが建ち並んでいた。



国境付近は落ち着いた雰囲気

に入学してくるウクライナ人がばらばらと1時間に30人ほど見られる一方、モルドバ側からもバスや自動車でウクライナへ向かう人たちの姿も見られた。
国連機関のひとつである国際移住機関（IOM）の関係者によると、レジストレーション・センターのメディカルチェックは、健康上問題を抱えた人たちにのみ実施しており、これまでに数人がキシナウにある医療機関に搬送されたケースがあったという。
ボーダーエリアからは、キシナウやブカレスト（ルーマニア）に向かうバスが走り、徒歩で国境を越えてきた人たちを乗せ、目的地へ向けて出発していた。

コロナ対応などアピール

TMATから3演題発表

第27回日本災害医学会総会・学術集会が3月3日から3日間、広島県で開かれた。メインテーマは「災害医療のパラダイムシフト―何を攻め・守り・育てるのか―」。会場参加とオンライン参加のハイブリッド形式で行った。徳洲会の職員を中心に構成するNPO法人TMATは、一般演題（口演、ポスター）で3演題を発表した。

電話相談で職員にメンタルサポート



野口 幸洋
NPO法人TMAT事務局員
一般社団法人徳洲会
医療安全・質管理部課長補佐

で発生した感染者の受け入れを開始するにあたり、メンタルヘルス専門家の協力を得て、対応職員向けの電話相談窓口を設置。その後、グループ病院・施設がCOVID-19に対応するにあたり、4月からは常設の相談窓口を設置し、21年9月までに40件の利用があった。

なかには職員個人の不安軽減や、組織としての感染対策上の課題解決に結びついた例もあり、副次的効果として、クラスター（感染者集団）発生時や職員に陽性者が発生した際に、同窓口を活用した職員への個別フォローアップができたことをアピールした。

一般演題（口演）で「COVID-19への対応に関する医療従事者向けのメンタルヘルス相談窓口開設の取り組み」と題し発表した。まずCOVID-19対応者のメンタルストレスの大きさは、各国から報告されていると提示。そのうえで同演題では、患者さんの積極的な受け入れ方針を実施した徳洲会グループにおいて、職員のメンタルヘルス支援の仕組みを構築した事例を報告した。

2020年2月に大型客船

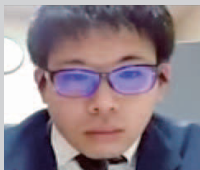


テーマは「災害医療のパラダイムシフト」

は、当該職員の精神的な負担を軽減し、管理職職員のメンタルヘルスに対する意識向上、長期的には離職予防につながることを考えます」と強調した。

このほか、一般演

施設に特化した病院防災



合田 祥悟
NPO法人TMAT医師
札幌東徳洲会病院
救急・集中治療センター医師

一般演題（ポスター）で「NPO法人TMATによる病院防

災の取り組み（DoRa program）」と題し発表。近年、大小様々な災害が至る所で発生しており、札幌東徳洲会病院でも、北海道胆振東部地震（18年9月6日）では多大な影響があったことを明かした。そのうえで、病院としては、自院の被災に対応するのみではなく、発災後に増大する医療需要への対応も余儀なくされると強調した。

ただし、こうした状況に対応するための「防災マニュアル」があっても、それをもとにした防災訓練を実施していないなどの理由から、実効性に



会場となった広島国際会議場

災害発生時対応学ぶ

千葉病院と静岡病院で開催

NPO法人TMATは2020年に新しい研修コースである「病院防災コース」を創設した。同コースは講義やグループワークを通じて病院職員が有事の際の対応方法を習得し、院内の防災意識を高めるのが目的。

同コース創設の意義について、福島安義TMAT理事長は、「ひとことで病院と言っても、規模も設備も違いますので、各病院がそれぞれに合った形で災害時の備えをしていかなければいけません。これはBCP（事業継続計画）のひとつでもあります」と強調。

さらに具体例にも言及し、「たとえば大地震でガスが止まった場合、冬の寒冷地では暖房器具が使えなくなり、死活問題にもなりかねません。このため医療機能の維持だけでなく、こうした問題も含めあらためて見直す必要があります。その手伝いをTMATがしたいと思います」と明かした。

21年には2施設で同コースを開催。9月18日に千葉徳洲会病院（第2回）、11月20日に静岡徳洲会病院（第3回）でそれぞれ実施した。開催前日にはTMAT



有事の際の対応方法を講義やグループワークを通じて習得（千葉病院）



コースの締めくくり事後テストで確認（千葉病院）

インストラクターが、開催する病院を見学し、建物の構造や配置を把握、動線を考慮し、トリアージ（重症度・緊急度選別）エリアとして最もふさわしい場所を確認するなど準備に力を入れる。

千葉病院では感染対策を徹底し30人が受講。講師は札幌東徳洲会病院の合田祥悟・救急集中治療センター医師が務め、四街道徳洲会病院（千葉県）の柳澤修平・看護師長、成田富里徳洲会病院（同）の浅野昌子・看護師がサポートした。

講義からスタート。災害急性期の動的な対応に関し取り決めた記した「防災マニュアル」や、具体的な行動を示す「アクションカード」などが重要であると強調し、実際に使用に耐えられるか随時見直すことも必要であると助言した。

講義の後はグループワークを実施。まず「発災前準備」では、災害対策本部のメンバーを、院内の職員を実際に配置して検討。さらに同院の見取り図を使い、トリアージエリアの設置や人の流れを話し合い、グループごとに発表した。

続いてテーマを「発災後」に移



感染対策を徹底し30人が受講（千葉病院）

一方、静岡病院では20人が受講。同コースに参加した志賀千明・看護師長は「有事の際の職員の役割を明確にし、院内防災マニュアルやアクションカードを再度確認すると同時に、あらためて職員がそれらを理解する必要があると思います」と受講の意義を強調した。

インストラクターを務めた合田医師は「研修に参加した職員の方と、静岡病院の実情に沿った基礎的な病院防災を一緒に考えることができました」と振り返り、「発災時にはスタッフ同士の連携強化が重要になりますので、既存の物を使用しながら、職員同士が協力し合って乗り越えてもらいたいと思います」とエールを送った。



職種や経験も違う20人が受講（静岡病院）

HPで活動情報など発信

<http://www.tmat.or.jp>



QRコードを読み取ってアクセス！



TMATホームページのトップ画面

TMATはホームページを通じて積極的に情報発信に努めている。活動内容や活動指針、代表挨拶、定款など基本情報に加え、「NEWS・お知らせ」として、豊富な写真とともに国内外での活動の模様を紹介。TMATが主催する研修会（災害救護・国際協力ベーシックコース、国内災害医療支援トレーニングコース）の告知なども行っている。

また、2006年6月に発刊したTMATニュースについては、第1号からすべてのバックナンバーをPDFで公開。さらに、TMATへの入会案内、募金方法、研修会のプログラムの紹介など盛りだくさんのコンテンツだ。TMATのFacebookへのリンクも貼ってある。



オンライン開催の初回はグループ外からの参加もあり計30人が受講

「国内災害の実際」の講義では、国内の災害医療支援体制の全体像、災害時に連携が必要な

初回のオンライン開催は、全国16病院に加えグループ外からの参加もあり計30人が受講。講師は札幌東徳洲会病院の合田祥悟・救急集中治療センター医師、四街道徳洲会病院（千葉県）の柳澤修平・看護師長、松原徳洲会病院（大阪府）の西村浩一・看護副主任、福岡病院の油江まき看護師、一般社団法人徳洲会（社徳）医療安全・質管理部の野口幸洋・課長補



札幌東病院では31人が受講



福岡病院では19人が受講



成田富里病院では30人が受講

国内災害医療支援トレーニングコース

オンラインで初開催

複数の病院が参加し交流も活発

国内災害医療支援トレーニングコースは、2021年7月～22年6月の間に、11回の研修で、初めてオンラインでも実施。通常であれば、受講者は会場になった徳洲会病院の職員が中心になるが、オンラインでは複数の病院から参加できるため、受講者同士の交流も活発だった。

行政機関に触れ、TMATの歴史や活動実績、教育活動などを紹介する。机上訓練では、災害発生から隊員派遣、被災地での医療支援活動と撤収までの流れをシミュレーションしながらグループワーク形式で学ぶ。さらに、災害診療記録（仮設診療所などで診療した患者さんの記録）や、施設・避難所などラピッドアセスメントシート（避難所を中心に周辺地域の被災状況やニーズを適切に把握するための調査票）の記入訓練も実施する。

2回目のオンライン開催は、全国11病院から29人が受講。講師は湘南藤沢徳洲会病院（神奈川県）の高力俊策院長、合田医師、成田富里病院の浅野昌子看護師、福岡徳洲会病院の油江看護師、和田秀一看護師、社徳の野口・課長補佐が務めた。総括で野口・課長補佐は「研修には、TMATがどのような視点で活動し、どのような問題に直面してきたのか、すべて入れ込んでいます。今回学んだ情報を覚えておいていただければ、次に国内で災害が起きた時に、隊員として同じ感覚で活動できると思います」

さらに、現地の活動をもっと具体的に聞きたい受講者に向け、TMATのホームページで公開している活動報告会の動画を紹介。TMATは2021年7月に発生した「令和2年九州南部豪雨災害」で、7月5～17日の期間で熊本県に総勢17人の隊員を派遣し、被災地支援活動を実施。この報告会は10月10日にオンラインで開かれ、先遣隊・本隊第1陣・本隊第2陣の代表者による活動報告が行われた。最後に高力院長が「避難所で働く現地の保健師さんや役

所の職員さんは、自らが被災者でもあり、被災地対応に慣れています。こうした方々には、私たちが正しいと思うことを押し付けるのではなく、相手の気持ちを考えて控えめに提案することが大切です。こうした気持ちは病院で働く時も同様ですので、日頃から気を付けていただければと思います」と助言し、閉会した。受講者からは「資料がわかりやすく、しっかりと学べました」、「実際に現場に行った隊員から、体験談を交えた講義を受けることができて良かったです」、「自分にはなかった発想や考え、支援の視点を学ぶことができ、支援活動への思いが増しました」など感想が聞かれた。

一方、集合研修も感染対策を徹底したうえで継続開催に尽力。2021年10月17日以来、約1年ぶりの集合研修の開催となり、札幌東病院では31人、福岡病院では19人、成田富里病院では30人が受講した。次回は9月に榛原総合病院（静岡県・募集範囲は未定）で開催予定。オンラインでは随時開催する計画だ。



オンライン開催での本部会場の様子



オンライン開催の第2回は全国から30人が受講し全員が修了

WHOによるEMT認証 今年度中の認証を目指す

グローバルミーティング 3回参加

NPO法人TMATは、国際的な災害医療活動におけるWHO（世界保健機関）の認証制度である、EMT（Emergency Medical Team）の認証プロセスに入った。同制度はWHOが国際的な災害医療活動を行うチームの質を担保するために設けられた制度。TMATは過去3回のグローバルミーティングに参加し、この制度の理解を深めてきた。同制度は3段階のカテゴリーに分類され、TMATは外来診療を中心に行う「Type1-mobile」として申請。WHOからTMATの認証をサポートする2人のメンター（指導者）が決められ、オンラインミーティングを中心に指導を受けている。災害活動に関する標準手順書の作成や、医療資器材やロジスティクス体制などを整備し、最終的にWHOから審査員が来日して最終認証を受けられる。TMATは今年度中の認証を目標に準備を進めている。

EMT認証に向けた
メンターミーティングの様子

TMATは皆様からのご支援のもとに 精力的に活動しています！ ご協力をお願いいたします！！

1995年の阪神・淡路大震災での活動を契機にスタートしたTMATは、世界の人々の生命と健康を守るため、災害医療支援をはじめ総合的な医療支援活動を各国政府やNGO（非政府組織）、地域団体と協力しながら活動しているNPO法人です。私たちの活動は、主に企業・団体・個人の皆様からTMATの会員として資金協力していただくことで支えられています。ぜひ、ご協力ください。

正会員年会費 10,000 円
個人賛助会員年会費 ... 1口 3,000 円(1口以上)
団体年会費 1口 30,000 円(1口以上)

クレジットカードによるご協力

http://www.tmat.or.jp/donate_on_the_credit/
※VISA/MASTER/JCB/AMEX/DINERSの各種カードがご利用いただけます。
※提携カードでは、お取り扱いできない場合があります。

振り込みによるご協力

- 郵便口座記号番号：00170-4-564249
- 銀行名：ゆうちょ銀行
- 金融機関コード：9900 ■ 店番：019
- 預金種目：当座
- 支店名：〇一九（ゼロイチキウ）店
- 口座番号：0564249
- 受取人：特定非営利活動法人 TMAT

振込先口座